



生きがい交差点

私の愉しみ



▲昨年5月のアイアンマンジャパン・五島長崎大会にて。タイムは11時間36分を記録

大自然を舞台に過酷なデッドヒートが繰り広げられるトライアスロンでは、「泳ぐ(Swim) 自転車(Bike) 自らの足で走る(Run)のすべてを乗り越えたものだけがゴールを許される。スライムでは疲労のため腕があらなくなり、長時間に及ぶバイクでは足、背中などの筋肉が悲鳴をあげる。そして、あえぎあえぎゴールを目指すランと、あまりにも過酷なレースだ。それでもなぜトライアスロンなのか。「それはやつぱり、あのゴール後の達成感と感激があるからです」と本吉さんは答える。異なる3

つの競技をやり遂げてこそフイニッシャー(完走者)の栄誉が得られるトライアスロンは、さまざまな局面を試行錯誤して成長していく人生そのものに似て、見るものの心を打たずには置かない。

トライアスロンは1974年、アメリカのカリフォルニア州が発祥の地。現在ではさまざまなコース体系のレースがあり、オリンピックディ

スタンスと呼ばれる全51・5km(S1・5km・B40km・R10km)のほかミニレースも多数行われている。しかし、口

ングディスタンスではトライアスリートの最高峰であるハワイ・アイアンマンレースに代表されるS3・9km・B180km・R42・2km、競技時間12時間以上の、文字通り「鉄人レース」となっている。

本吉さんがトライアスロンに初参加したのは32歳の時。どちらかと言えば若い年齢からのスタートだ。走ることに

後、「横浜鉄人クラブ」に所属した。情熱的な指導者や、互いに切磋琢磨し合えるよき仲間巡りに出会ったこともあり、精神的にトレーニングを積んでいる。就業後の夜の時間を使ってラン&スイムを毎日各1時間ほど、休日にはバイクの長距離トレーニングをこなしている。

32歳の初レースを皮切りに、その後はロングディスタンスの大会を中心に完走の実績を積み。そして、2000年にはトライアスリートの聖地ともいわれるハワイ・アイアンマンレースへの切符を手にした。これは、各国のアイアンマンレースを戦い抜いたアスリートが選ばれて出場できる世界選手権で、本吉さんは二人の娘を伴ってハワイへと渡った。世界の強豪が集つたが、成績は必ずしも満足できるものではなかったが、栄えある舞台で家族の応援を受けながら完走できたことは、自身のレース経験のなかで最大の喜びとなった。また、緊張感あふれる世界の松舞台を経験したことは、トライアスロン人生の成果として満足できるもので、「また次も参加したい」という大いなる目標を持つに至る。完走をめざし過酷なレース

本吉さんは、「あと、自転車を意図すれば」という思いが芽生えたという。そこで同競技の神奈川県協会に登録

32歳の初レースを皮切りに、その後はロングディスタンスの大会を中心に完走の実績を積み。そして、2000年にはトライアスリートの聖地ともいわれるハワイ・アイアンマンレースへの切符を手にした。これは、各国のアイアンマンレースを戦い抜いたアスリートが選ばれて出場できる世界選手権で、本吉さんは二人の娘を伴ってハワイへと渡った。世界の強豪が集つたが、成績は必ずしも満足できるものではなかったが、栄えある舞台で家族の応援を受けながら完走できたことは、自身のレース経験のなかで最大の喜びとなった。また、緊張感あふれる世界の松舞台を経験したことは、トライアスロン人生の成果として満足できるもので、「また次も参加したい」という大いなる目標を持つに至る。完走をめざし過酷なレース

また一方、トライアスロンはあらゆる世代が楽しめるスポーツともいわれている。日常から、しっかりとした基礎トレーニングを積み、60歳70歳でも現役でいられる場合が多い。本吉さんの当面の目標も、現在の力を落とさずキープしていくこと。そうすれば歳を重ねることに、世代別カテゴリの中で成績が上がら、ハワイへの道もまた確かなものになってくる。

再度のハワイ挑戦を夢見る本吉さんは、今日もトレーニングに励む。その顔は、苦しげであり、またやはり愉しげでもある。



三菱樹脂 本吉民男さん

「プロフィール」 「もとよし たみお」三菱樹脂ビジネスシステム部OAシステムグループ課長、社内および関連会社のOAシステムの調達・整備、ネットワークの企画・整備などを担当。昭和30年生まれ(48歳)身長165cm・体重60kg。

冒険と野性味あふれる感動のゴールめざす48歳の肖像